読者の広場

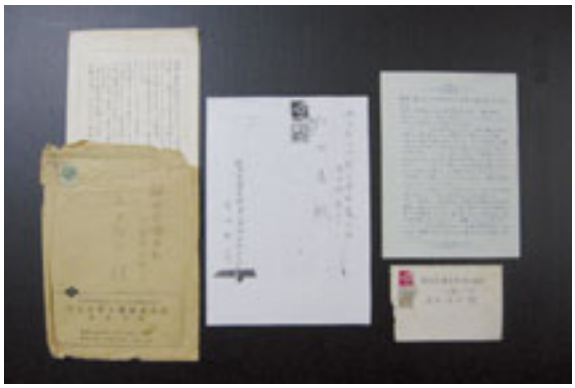
測夫・生田 信と剱岳
100年間，生き続けた話

静岡県　生田 八朗

40年前の松村寿さんの手紙

私と剱岳との関わりが始まったのは，昭和41年の7月でした。当時，私は日本大学で建築の勉強をしていました。その時，福島県郡山の自炊先に父から電話があり，「日本山書の会の松村寿さんという方から手紙があって，信（のぶ）おじいちゃんが昔，明治40年に初めて北アルプスの剱岳に登ったといっている。そのときの思い出話や資料があったら送ってほしいと言ってきた。どうしたらいいだろうか」という話だった。「分かることは，知らせておいた方がいいよ」と返事をした記憶があります。

この松村寿さんの手紙が，わが家と剱岳との関わりの始まりであり，この話は40年の間，常に私の頭の片隅に残り続けておりました。それがついに40年の熟成の期間を経て松村さんからの手紙が，日の目を見る日がやってきました。松村さんには失礼な話になりますが，何せ40年前の話ですので住所は勿論のこと松村さんの生存すら分かりませんでした。ところが，平成18年の4月2日に立山博物館を訪れた際，吉井亮一学芸員の方に松村さんの手紙を見てもらい，そのことを話したところ，幸いにも住所が分かり教えて頂きました。松村さんとは，丁度，平成19年の10月18日から地図展推進協議会主催の剱岳測量百年記念「地図展2007 in 富山」が開催され，この地図展見学の20日南砺市の自宅でお会いする約束が取れました。40年もの長い間温めてきた手紙の相手にお会いできる嬉しさで，心弾む思いでありました。



松村さんと父・沢司の手紙
※松村寿さん（松村懸壷堂薬局経営・昭和30年代に日中国交回復に尽くされた元衆議院議員松村謙三氏の孫・富山県南砺市福光新町）

測夫・生田信（写真）再び剱岳へ登る

松村さんからの手紙以来，私は昭和43年に日大の建築学科を卒業して，静岡市（当時清水市）の山口建築設計事務所に勤めていました。どこからだったか記憶にありませんが，剱岳の初登頂のことが文藝春秋から発表されるという情報が入りました。その内，月刊誌『文藝春秋』に部分的に掲載されるでしょうと思っていましたところが，ある日1冊の書籍がわが家に送られてきました。しかも，見開きに山の作家新田次郎先生のサイン入りの本『劔岳・点の記』です。「うわー，これはすごいことになった！」と思い，近所の本屋さんで，2冊も買い求め，兄弟，親戚に渡して読んでもらいました。

測夫・生田信の名前が最初の方から終わりまで，物語の流れに沿って随所に登場する度に胸を躍らせ，すごいことを達成したものだと感じながら一気に読み終えました。単行本が発行されたのは昭和52年8月30日（第1刷）となっています。

このとき以来，祖父が登った歴史的な山・剱岳に思いを馳せ，いつかは私も登ろうと考えていました。そのときがいよいよやってきました。登る日は，本の中で祖父たちが登った7月13日が希望でしたが，妹の主人2人の仕事の都合もあり，昭和56年7月12日の日曜日に義弟2人を伴い3人で剱岳の頂上を目指すことになりました。

3人は国道52号線を夜通し走り，扇沢で早朝仮眠を取り，そこからトロリーバス，ケーブルカー，ロープウェイなどを乗り継いで室堂に着きました。当時，山登りは今ほど盛んではなく，我々の登山姿はあまりにも素人臭く，履く物も着る物も日本の3大岩場を登る登山者の格好ではありませんでした。しかし，下の妹の主人は，先頭に立ち履きなれた消防靴で，雪渓の雪を力強く踏み固めてくれました。私は，36歳の若さか

ら，訓練らしい訓練もしないで，いきなり挑戦したのが剱岳でした。祖父の登った剱岳に祖父の写真と共に立ちたい一心で…。らいちょう沢経由で佐伯友邦さんの剱沢小屋に1泊しました。7月12日朝6時，いよいよ未知の世界剱岳へ出発です。今のようにインターネットで情報や画像が得られない時代で，かにのヨコバイやタテバイの怖さも知らないうちに登り切り，11時頃頂上に到着しました。ビニールの袋に入れて持ってきた祖父の写真を胸に記念撮影をしました。快晴に恵まれ，初めての山登りの達成感よりも，祖父生田信の写真でしたが再度，剱岳の頂上に立てたことの喜びで，感慨一入でした。当時も人気の山だったのでしょうか，頂上では数人の登山者にも会いました。『剱岳・点の記』の測夫・生田信の写真を見て，一緒に撮らせてくれと頼まれ，快く一緒に写っていただきました。

剱岳山頂にて（真ん中が筆者，右手に写真）

山の天気は時間と共に変化することを聞いていたので，12時前に昼食も済ませ，緑の富山平野と藍色の日本海のパノラマを充分堪能してから下山を始めました。途中，深い霧の中で，剱沢小屋の上方の雪渓を登り過ぎ，道に迷ってしまいました。室堂の最終バスに遅れないように気をもみながら，一瞬の霧の切れ間から昨日泊まった剱沢小屋を見つけて下山方向を修正でき，無事バスの出発に間に合いました。登山経験の全く無い俄か登山者が，一瞬の霧の切れ間に小屋を見失っていたらどうなっていただろうかと思うと，偶然の出来事に感謝，感激の初登山でした。下山後の夕食に，疲れと空腹から焼肉を貪るようにおいしく戴いたことが，昨日のように思い出されます。剱沢小屋の佐伯友邦さんから頂いた錫杖の頭の文鎮は，今もなお大事に保存しています。

新田先生と藤原先生の署名本

佐伯さんからの錫杖の頭

測夫・生田信　錫杖杖の頭と100年目の再会

昭和56年7月の剱岳登山以来，暖めていた企画がありました。柴崎測量官一行が初登頂してから100年目を迎える記念すべき年に，立山博物館を訪れて，剱岳から持ち帰った錫杖の頭の実物と祖父生田信の写真と対面させることでした。平成18年4月2日，我々夫婦と姉の夫の3人で，岐阜の関市に嫁いだ長女の家に1泊して，立山博物館に向かいました。

立山博物館の吉井亮一氏と連絡が取れていたので，早速応接室にて剱岳の話で花が咲き，いよいよ2階に展示されている錫杖の頭とご対面です。腕に調査員用の腕章を着けて，展示ケースの前に祖父の写真をかざした時には，感激のあまり涙の出そうな感情に駆られました。この時，同行の2人もケースの蓋を開けて，直接空気に触れさせてくれた立山博物館の取り計らいに感動した，と感謝のお礼を述べていました。

富山市に戻り，すし屋に入り遅い昼食を食べてから，冷たい雨の降りしきる中，富山県警察本部を訪れました。常日頃，剱岳をはじめ立山一帯の山岳警備のご苦労に対する敬意を表するためです。対応していただいたのは，山岳警備係長高瀬洋さんでした。4時ごろでし

立山博物館の「錫杖の頭」展示室にて

たが，既に夕暮れの雨の富山にお別れをして，一路静岡へ向かいました。約100年前，直に祖父の手に触れたと思われる錫杖の頭の実物を目の当たりにした満足感に浸りながら，川根の我が家に着いたのは，真夜中の1時過ぎでした。

吉井学芸員の話の中で，国土地理院北陸地方測量部で剱岳登頂100周年の記念事業を企画していることを伺いました。早速わが家で，パソコンから検索すると平成18年に富山の高校生たちが三等三角点設置の為，70kg近い御影石を途中まで背負い，最後はヘリコプターで剱岳の頂上に設置したということでした。明治40年に2,998mを測量した先人も，大変なご苦労だったと思いますが，御影石による念願の三等三角点の設置を100年後に企画・実行した国土地理院北陸地方測量部の方々に大きな拍手を送りたいと思います。

なお，立山博物館の建物は，静岡市内の舟の形をしたグランシップを設計した福岡県の磯崎新先生の作品ということです。

測夫生田信はなぜ？静岡から剱岳へ

昭和41年の松村寿さんからの手紙を頂いた後，新田次郎先生の『劔岳 点の記』の出版があり，そして平成18年の立山博物館訪問まで長い間疑問に残っていたことがありました。祖父生田信は，なぜ明治40年頃に川根の山奥から東京に出掛けたのでしょう。その謎がやっと解けてきました。89歳になる母のことば「おじいちゃんは，東京ではうすいさんに大変お世話になった」というのがキッカケでした。新田先生の文中97頁後半に臼井由清測量官の名前が1回だけ登場します。この臼井さんと気がついたのが再読4回目の時でありました。早速，国土地理院の髙橋部長さんに臼井由清測量

生田 信（左）と上司

官の調査を依頼しました。私の推測通り，臼井測量官が明治37年から38年にかけて静岡県の南アルプスの山々を測量に来ていました。その時10代後半の若者生田信が測量の仕事に雇われたことが剱岳への測量に結び付いたと思われます。東京で郵便配達の傍ら測量の仕事に従事したことが『劔岳 点の記』として映画化され，祖父も遠い美空でさぞかし驚いていることでしょう。剱岳登頂の明治40年から富山県の「地図展」までの100年間は，柴崎測量隊に加わった祖父・生田信を発掘する100年間でした。この発掘を我が家の貴重な記録として，これからの100年後までも，語り継いでいきたいと思います。

生田八朗プロフィール

生年月日：昭和20年4月23日生まれ
学　　歴：日本大学工学部建築学科卒業
職　　業：生田建築設計事務所　1級建築士
　　ブルーベリー生産・販売（1,500本栽培）
経　　歴：元本川根町消防団長
　　元本川根町議会議員
　　元本川根町商工会理事
　　現大井川を再生する会々長
趣　　味：ゴルフ，読書，映画鑑賞
家　　族：母ひで子，妻悦子（ノンキ堂生田商店経営）